『大般涅槃経』における仏弟子チュンダとその供養

佐　藤　直　実
（京　都　大　学）

1. 問題提示

釈尊入滅を題材にした〈大般涅槃経〉（skt. *Mahāparinirvāṇa-sūtra*）には，初期仏教（非大乗）と大乗の二種類がある。前者は，ラージャグリハ（skt. Rājagṛha）からクシナガラ（skt. Kuśinagara，Kuśinagarī）にいたるまでの釈尊最後の旅と，火葬や舎利分配等の入滅後の様子を扱っている。一方，後者は入滅時の弟子との問答に焦点を当てており，前者で記されるような旅の様子や入滅，荼毘，舎利分配の記述はない。

両経典は構成や内容を異にするものの，一致する点も多く，たとえば，最後の供養者として純陀，すなわちチュンダ（skt. Cunda）を記す点は同じである。両者共に，チュンダの供養は釈尊成道時になされた供養と等価値であると主張するが，その扱い方は異なる。

初期仏教系では，釈尊はチュンダの供養を食したことで腹痛になり，それが原因で入滅が早まったと記される。そして，入滅後，チュンダが後悔したり，大衆に非難されるのを心配した釈尊が，アーナンダに次のように委託する。すなわち，チュンダの行為は成道時の布施に匹敵するほど功徳がある。それを彼に告げなさい，と。

一方，大乗系の場合は，次のような流れで二つの布施が比較される。チ

ュンダが登場するまでの間，王族から神々，魔物にいたるまで，あらゆる生き物が最後の供養を施そうと釈尊のもとに馳せ参じるが，皆悉く断られ，落胆していた。そこにチュンダが現れ，あっさりと供養を承諾されるのである。衆生は驚愕しつつ，おおいに喜び，チュンダを讃歎する。釈尊も，チュンダの供養を成道時の供養と等しく尊いものであると讃歎する。

このように両経典では成道時の供養とチュンダの供養とが等価値であると述べられる。しかしながら，その言説が置かれる文脈は全く異なっている。初期仏教系では，成道時の供養は衆生のチュンダへの非難を避けるために示されるのに対し，大乗系では，チュンダのすばらしさを強調するために用いられている。

いったいなぜ，同じ人物，同じ行為に対してこのような正反対の評価がなされたのであろうか。本論では，両経典に描かれる仏弟子チュンダを比較し，その理由について考察する。

2. 資料紹介

先述したとおり，〈大般涅槃経〉は初期仏教系と大乗系の２種類を擁する特異な経典である。両者にはインド原典はもとより，さまざまな翻訳があり，注釈書も存在し，現代語訳も種々公刊されている。本稿では筆者が使用した主要なもののみを紹介し，より詳細な書誌情報については，新国訳大蔵経『大般涅槃経（南本）Ⅰ』解題，ならびに下田1997/2000を参照していただきたい。[(1)]

2.1. 初期仏教の〈大般涅槃経〉

初期仏教の〈大般涅槃経〉（以下，初期〈涅槃経〉）には，梵本が１本，パ

ーリ語が1本，漢訳が5本，チベット語訳が1本現存する。なお，出典箇所を示す場合は［　］内の略号を使用する。

MPM［M］ *Mahāparinirvāṇa-sūtra*（Waldschmidt 1986: 26. 1–29. 9）≒雑事，雑事 tib

MPMp［Mp］ *Mahāparinibbāna-suttanta*（Dīghanikāya II: 4. 13–43）

失訳［失］ 失訳『般泥洹経』全2巻（大正1，No. 6：183a–184c）

泥洹経［泥］ 西晋・白法祖『仏般泥洹経』全2巻（大正1，No. 5：167c–168c）

遊行経［遊］ 後秦・仏陀耶舎，竺仏念『遊行経』（『長阿含経』第2–4巻，大正1，No. 1（2–4）：18a–20a）

法顕訳［法］ 東晋・法顕訳『大般涅槃経』全3巻（大正1，No. 7：196c–199a）

雑事 唐・義浄『根本説一切有部毘奈耶雑事』第35–40巻（大正24，No. 1451：390b–392b）

雑事 tib tr. Vidyākaraprabha，Dharmaśrīprabha，Dbar ’byor，*’Dul ba phran tshegs kyi gzhi*（北京版 no. 1035，デルゲ版 no. 3）

雑事ならびに雑事 tib は MPM と同系列と考えられ，Waldschmidt 1986 はこれらに基いて校訂している。

初期〈涅槃経〉は釈尊の三か月にわたる最後の旅と，入滅後の荼毘および仏塔建立を題材にしている。釈尊は，王舎城からヴァイシャーリーを経て，クシナガラにいたる間にさまざまな都市に立ち寄り，説法を行ったのち，クシナガラで般涅槃し，葬儀が営まれる。チュンダと出会うのはクシナガラの直前に訪れた都市，パーパーにおいてであり，そこでチュンダか

ら最後の供養を受けるのである。

これら8本の文献は，細かな点での相違はあるが，大筋は一致する。ただし，法顕訳のみは王舎城ではなく，ヴァイシャーリーから始まる。

本稿では和訳も公刊され，一般に流布しているMPMpと遊行経を基に，他の諸本と比較しながら考察を進める。

2.2. 大乗仏教の〈大般涅槃経〉

大乗仏教の〈大般涅槃経〉（以下，大乗〈涅槃経〉）には，サンスクリット断片が3種類，漢訳が3本，チベット語訳が2本現存する。初期〈涅槃経〉よりもはるかに大部の経典である。前項に示したとおり，出典箇所を示す場合は［　］内の略号を使用する。

MPMS［MS］ *Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra*（Habata 2007: pp. 27–55, 松田1988：p. 35–44，72/C1）※断片のみ

六巻本［六］ 法顕訳『大般泥洹経』全6巻18品（大正12，No. 376：857c–859b，896a–c）

北本［北］ 曇無讖訳『大般涅槃経』全40巻13品（大正12，No. 374：371c–373b，423c–424c）

南本［南］ 慧厳，慧観，謝礼運編纂『大般涅槃経』全36巻25品（大正12，No. 375：611b–613a，665a–666a[2]）

翻訳tib［翻t］ tr. Jinamitra，Jñānagarbha，Devacandra，*'Phags pa yongs su mya ngan las 'das pa chen po theg pa chen po'i mdo*（『中華大蔵経』54巻 no. 788：45–，北京版 no. 788，デルゲ版 no. 120）全13巻4章[3]

重訳tib［重t］ tr. Wang phab shun，Dge ba'i blo gros，Rgya mtsho'i

sde, *'Phags pa yongs su mya ngan las 'das pa chen po'i mdo*（『中華大蔵経』52-53巻 no. 787：43-，北京版 no. 787，デルゲ版 no. 119）全42巻15章[4]

六巻本および北本はいずれも 4 世紀初頭に翻訳され，約20年後に両経典をもとに南本が再編された。六巻本および翻訳 tib の内容は，北本の前10巻分，分量としては1/3に相当する。発見されているサンスクリット断片（MPMS）も北本の前半1/3に相当する部分からのみである。北本に関しては，少なくとも前半1/3はインド原典からの翻訳であろうが，後半2/3についてはその由来は不明のままである。

また，チベット語訳のうち，翻訳 tib はジナミトラ，ジュニャーナガルバ，デーヴァチャンドラによって 9 世紀初頭に翻訳され，分量は六巻本と同じである。一方，重訳 tib はワンパプスン，ゲウェーロドゥー，ギャムツェデによって11世紀に北本から重訳された[5]。なお，漢訳には，入滅後の荼毘と仏塔建立について記す若那跋陀羅訳『大般涅槃経後分』全 2 巻（大正12，No. 377）があり，重訳 tib はこれを末尾に付加して翻訳している。

本稿では主に六巻本，北本，翻訳 tib を用い，他の諸本は適宜参照した。

チュンダが登場するのは，北本でいうところの「寿命品」（法顕本「長者純陀品」，南本「純陀品」）および「一切大衆所問品」（法顕本「随喜品」，南本「一切大衆所問品」）の 2 品である。

また，同じく釈尊の入滅を描く有名な経典として，『遺教経』と称される鳩摩羅什訳『佛垂般涅槃略説教誡經』全 1 巻（大正12，No. 389：1110c-1112b）があるが，同経は馬妙作の *Buddhacarita*（『仏所行讃』大正 4，No. 192）や『仏本行経』全 7 巻（大正 4，No. 193）との関係が深く，本稿が取り上げる大乗〈涅槃経〉とは異種のものである。

3. 初期〈涅槃経〉の描くチュンダ

3.1. 梗　概

チュンダはパーパーに住む鍛冶屋の息子，すなわち金属細工を生業とする職人の家系に生まれた青年である。サンスクリットでは *karmāraputra* と記され，漢訳では「大師」「工巧子」「鍛師子」，チベット語訳では *mgar ba'i bu* と訳される。

細かな相違はあるが，諸本に共通の流れは以下のとおりである。

(1)　ヴァイシャーリーにて，釈尊は自らの寿命の因（pali āyusaṃkhāra）を絶ち，入滅の覚悟を固める。

(2)　パーパーにてチュンダは釈尊と出会い，施食を懇請。釈尊は沈黙によって承諾する。

(3)　チュンダは食事の準備のために自宅に戻る。

(4)　翌朝，チュンダは釈尊と比丘僧団に食事を施す。

→悪比丘が施食を盛っていた銅の皿を盗み，チュンダは四種の沙門について問う。

［Mp］釈尊は残った料理（pali sūkara-maddava）を埋めるようにアーナンダに指示。

(5)　釈尊はアーナンダにクシナガラを目指そうと告げる。

(6)　釈尊は背中が痛むため樹下に休み，アーナンダに水を汲むよう命じる。

［法］この後，(9)が記される。

(7)　バラモン・プッカサは議論の末に改宗し，釈尊に布を布施する。

(8)　釈尊の顔から光明が発せられ，入滅が近いことをアーナンダに告

げる。

⑼　**釈尊はアーナンダにチュンダが後悔しないように諭す。**

⑽　**釈尊はチュンダの供養は尊く，二つの布施の果報が平等であることを説く。**

3.2. 詳　説

上記の各項目について，MPMp を基に詳説する。なお，各漢訳も参考までに列挙しておく。

（1）　**釈尊，寿命の因を滅す**　　一般には，釈尊はチュンダの供養のせいで体調を崩し，入滅したと考えられている。しかし，ヴァイシャーリーにて釈尊は神通力によって自らの寿命の因（pali āyusaṃkhāra）を滅しており，入滅はチュンダに出会う以前からすでに決まっていたことであった（Mp3.10）。

（2）　**チュンダの懇請と釈尊の承諾**　　チュンダは釈尊が園林（skt. jalūkāvanaṣaṇḍa，pali ambavana）に留まっていることを知ると，すぐに集会に赴いた。釈尊から法話を聞いたのち，以下のように施食を願い出ると，釈尊は沈黙によってその申し入れを承諾する。

Mp4.15　　atha kho cundo kammāraputto bhagavatā dhammiyā kathāya sandassito samādapito samuttejito sampahaṃsito bhagavantaṃ etad avoca / adhivāsetu me bhante bhagavā svātanāya bhattaṃ saddhiṃ bhikkhusaṃghenāti / adhivāsesi bhagavā tuṇhībhāvena /

さて，鍛冶屋のチュンダは，世尊の法話によって教えられ，諭され，激励され，喜ばされて，世尊に次のように言った。「尊者よ，明日，世尊は比丘僧団とともに私と食事を［とることを］承諾してください。」世尊は沈黙によって承諾した。

失183a28-b2　有華氏子淳。獨留起整衣服。長跪白佛。欲設微食。願與聖衆。俱屈威神。佛以慈哀默而可之。

泥167c12-14　淳獨留須臾起持。繞佛三匝却叉手住白佛。明日寧可與諸比丘僧俱於舍飯食。佛默然不應。

遊18a29-b2　周那聞佛説法信心歡喜。即請世尊明日舍食。時佛默然受請。周那知佛許可。

法197a24-26　便從座起。整身威儀。偏袒右肩。頂禮佛足白言。世尊唯願。明日受我薄供。世尊即便默然許之。

雑390b11　准陀即便從座而起。整衣服合掌向佛白言。世尊。唯願如來與諸聖衆。明日就宅受我微供。佛默然受。

その後，チュンダは釈尊の入滅を嘆き，延命を懇請する。その彼に対し釈尊は，「諸行は無常であり，釈尊の入滅は必然であるから，嘆いてはならない」と諭す。ただし，MPMp にはこの内容は付されない。

(3)-(6)　チュンダの施食と釈尊の体調不良　施食の許可を得たチュンダは，ただちに自宅に戻り，支度を調え，翌朝，再び釈尊一行を迎えに上がる。そして，一行はチュンダ自身の手による振る舞いを受けるのだが，この食事中のエピソードは諸本によって微妙に異なる。

MPMp では，釈尊はチュンダに次のように言う。

Mp4.18…… yan te cunda sūkara-maddavaṃ paṭiyattaṃ, tena maṃ parivisa, yaṃ pan'aññaṃ khādaniyaṃ bhojaniyaṃ patiyattaṃ tena bhikkhu-saṃghaṃ parivisâti /

「チュンダよ，あなたの用意したキノコ料理を私に給仕してください。他の用意した硬い食べ物と柔らかい食べ物を比丘僧団に給仕してください。」

チュンダが言われたとおりにすると，釈尊は続いて次のように言った。

Mp4.19…… yan te cunda sūkara-maddavaṃ avasiṭṭaṃ, taṃ sobbhe nikhaṇāhi, nâhan taṃ cunda passāmi sadevake loke samārake sabrahmake sassamaṇa-brāhmaṇiyā pajāya sadeva-manussāya yassa taṃ paribhuttaṃ sammā-pariṇāmaṃ gaccheyya aññatra tathāgatassâti /

「チュンダよ，残ったキノコ料理を穴に埋めなさい。チュンダよ，神・マーラ・梵天・修行者・バラモンの世界や，神ないし人間という生き物の中でも，それを食べて，正しく消化できる者を如来の他に，私は知りません。」

釈尊はチュンダに，キノコ料理以外を比丘たちに与えるように言い，自分はキノコ料理を食し，残ったキノコ料理を穴に埋めるように指示する。それを消化できるのは自分（如来）だけだからというのが理由である。その後，釈尊はチュンダに種々の法を説き，それが終わると，アーナンダにクシナガラに急ごうと述べる。

これに対し，他本では以下のように記される。悪心を生じたある比丘が，

食事が盛られていた銅の皿を盗んだ。釈尊はそれを神通力でチュンダ以外の誰にも見えないようにした。食事の後，チュンダは，釈尊に沙門にはどのようなタイプの者がいるかを問う。すると，釈尊は沙門には道を知る者，道を教示する者，道に従って生きる者，そして道を汚す者の四種がいることを説き，それぞれについてさらに詳しく説明する。

クシナガラに向かう途上で，釈尊は体（背中）が痛んだために樹下に休み，アーナンダに水を汲んでくるように頼む。このエピソードも諸本によって異なっている。

(7)–(10)　プッカサの改宗，釈尊の顔より光明，アーナンダへの委託

釈尊が休んでいるとプッカサ（skt. Putkasa, pali Pukkasa）というバラモンに出会い，議論の末に彼は改宗する。その時に，釈尊に金色の布を布施するのだが，それを着た釈尊の顔が燦然と輝く。不思議に思ったアーナンダがその奇瑞の理由を釈尊に尋ねると，これは入滅の兆候であると告げられる。

そこで，チュンダは自分の施食のせいで釈尊が入滅すると思い，後悔する。それに気づいた釈尊は，アーナンダに次のように言う。

Mp4.42　atha kho bhagavā āyasmantaṃ ānandaṃ āmantesi / siyā kho pan' ānanda cundassa kammāra-puttasa koci vippaṭisāraṃ upadaheyya / tassa te āvuso cunda alābhā, tassa te dulladdhaṃ, yassa te tathāgato pacchimaṃ piṇḍapātaṃ bhuñjitvā parinibbuto' ti / cundassa ānanda kammāra-puttassa evaṃ vippaṭisāro paṭivinetabbo: tassa te āvuso lābhā, tassa te suladdhaṃ, yassa te tathāgato pacchimaṃ piṇḍapātaṃ bhuñjitvā parinibbuto /

sammukhā me taṃ āvuso cunda bhagavato sutaṃ sammukhā paṭiggahītaṃ, dve 'me piṇḍapātā samasama-phalā samasama-vipākā ativiya aññehi piṇḍapātehi mahapphalatarā ca mahânisaṃsatarā ca / katame dve / yañ ca piṇḍapātaṃ bhuñjitvā tathāgato anuttaraṃ sammāsambodhiṃ abhisambujjhati, yañ ca piṇḍapātaṃ bhuñjitvā tathāgato anupādisesāya nibbānadhātuyā parinibbāyati / ime dve piṇḍapātā samasama-phalā samasama-vipākā ativiya aññehi piṇḍapātehi mahapphalatarā ca mahānisaṃsatarā ca / āyu-saṃvattanikaṃ āyasmatā cundena kammāraputtena kammaṃ upacitaṃ, vaṇṇa-saṃvattanikaṃ āyasmatā cundena kammāraputtena kammaṃ upacitaṃ, sukha-saṃvattanikaṃ āyasmatā cundena kammāraputtena kammaṃ upacitaṃ, yasa-saṃvattanikaṃ āyasmatā cundena kammāra-puttena kammaṃ upacitaṃ, sagga-saṃvattanikaṃ āyasmatā cundena kammāraputtena kammaṃ upacitaṃ, ādhipateyya-saṃvattanikaṃ āyasmatā cundena kammāraputtena kammaṃ upacitan 'ti / cundassa ānanda kammāraputtassa evam vippaṭi-sāro paṭivinetabbo 'ti /

鍛冶屋の息子チュンダに，誰かが後悔を生じさせるかもしれない。「友，チュンダよ，如来はお前の最後の施食を食べてから般涅槃したのだから，お前にはその利益がなく，お前にはその功徳がない」と。アーナンダよ，鍛冶屋の息子チュンダの後悔は次のように取り除かれなければいけない。「友よ，如来はお前の最後の施食を食べて般涅槃したのだから，お前にはその利益があり，お前にはその功徳がある。友，チュンダよ，私はこのことを世尊から面と向かって聞き，承った。

これらの二つの食事は等しい実り，等しい報いがあり，他の施食よりもはるかに優れた実りと優れた功徳がある。二つとは何か。すなわち，如来が供物を食べてから無上正等覚を獲得したものと，如来が供物を食べてから無余涅槃界に般涅槃されたものとである。これらの二つの食事は等しい実り，等しい報いがあり，他の施食よりもはるかに優れた実りと優れた功徳がある。鍛冶屋の息子の青年チュンダは寿命を延ばす業を積んだ。鍛冶屋の息子の青年チュンダは容色を延ばす業を積んだ。鍛冶屋の息子の青年チュンダは幸福を延ばす業を積んだ。鍛冶屋の息子の青年チュンダは名声を増す業を積んだ。鍛冶屋の息子の青年チュンダは天界に生まれる業を積んだ。鍛冶屋の息子の青年チュンダは支配力を増す業を積んだ。」アーナンダよ，鍛冶屋の息子チュンダの後悔は以上のように取り除かれなければならない。

失184a29-b10　告阿難。朝從弟子淳飯。夜當滅度。汝解淳意。佛從汝飯。即夜滅度。天下有二難得値。若得遭値。面供養者。既解疑畏。且有正報。何等二。一爲若施飯食。令彼得以食之氣力。成無上正眞。爲至聖佛。二爲若施飯食。令彼得以食之氣力。棄所受餘無爲之情而滅度者。今淳飯佛。當得長壽。得無欲。得大富。得極貴。得官屬。終生天上。獲此五福。語淳勿憂。宜用歡喜。汝一飯佛而獲多報。當知佛者不可不敬。經法不可不學。聖衆不可不事。

泥168c5-10　佛告阿難。朝華氏子淳家飯我。今日夜半。當般泥洹。若告淳言。佛從若飯已。夜半當般泥洹。若當歡喜。語淳莫啼哭。若一飯佛得五福。若飯佛。佛持若飯食。氣力用般泥洹。淳得長壽。得端正。得富貴尊豪。得生天上。佛可敬。一飯佛得五福。

遊18c11-25　佛告阿難。向者周那無悔恨意耶。設有此意爲由何生。

阿難白佛言。周那設供無有福利。所以者何。如來最後於其舍食便取涅槃。佛告阿難。勿作是言勿作是言。今者周那爲獲大利。爲得壽命得色得力。得善名譽生多財寶。死得生天所欲自然。所以者何。佛初成道能施食者。佛臨滅度能施食者。此二功德正等無異。汝今可往語彼。周那。我親從佛聞。親受佛教。周那。設食今獲大利得大果報。時阿難承佛教旨即詣彼所。告周那曰。我親從佛聞親從佛受教。周那設食今獲大利得大果報。所以然者。佛初得道能飯食者。及臨滅度能飯食者。此二功德正等無異

法198c9-23 爾時淳陀心自咎責。世尊因受我之供飯。而患腹痛。欲般涅槃。爾時世尊知淳陀心。告阿難言。汝今當知。一切衆生。勿自責言。如來因受我之供飯。致使身患而般涅槃。所以者何。如來出世。有二種人。獲福最上。一者欲成阿耨多羅三藐三菩提時。而來奉施。二者如來臨欲般涅槃時。最後供飯。此二人福正等無異。所獲果報不可稱計。如此二施。難可値遇。如優曇鉢花時時乃有。爾時世尊即告淳陀。汝今心意正有此念。不應自生如此悔責。已獲無上難得之寶。宜應自生慶幸之情。百千萬劫。佛名 難聞。雖得聞名。見佛又難。雖得見佛。供養又難。雖得供養。在此二施。亦又甚難。汝今已果。不久當獲辯才智慧色力壽命。

雜391c10-20 准陀必當生追悔心。汝可安慰。報言。准陀。汝今多獲善利。能爲最後供養。大師受斯施已入無餘涅槃者甚爲難遇。應知准陀有二種因心生追悔。應爲開解作如是語。准陀。我自於佛親聞是語。有二種施所受果報無與等者。爲菩薩時受其食已。便證無上正等菩提。及以如來受最後食。入無餘依妙涅槃界。阿難陀。此二種施。所獲果報無與等者。阿難陀應知。准陀爲長壽業爲多力業。美貌生天財食貴勝眷屬等業悉皆增長。

残念ながら，上記の対応箇所を含む梵本（MPMS）は現存しない。しかし，その他全ての諸本には，成道時の供養と般涅槃時の供養（チュンダの供養）とは等しい果報があると記される。前者の供養（布施）は，如来がそれを食べて無上正等覚（pali anuttaraṃ sammāsambodhiṃ）を得た時のものであり[(6)]，後者は，それを食べて般涅槃する時のものである。また，この最後の供養により，チュンダは寿命を増し，容色を増し，幸福を増し，名声を増し，天界に生まれ，支配権を獲得する業を積むことになる。MPMp には「それ故，チュンダは後悔してはならない」とも記される。

このくだりは，釈尊が自分亡き後，チュンダが後悔し，落ち込まないように配慮したものであるが，それと同時に，周囲からの批判を回避しようとしたとも考えられる。つまり，チュンダの供養のせいで釈尊が入滅したという誤解が生じる可能性を懸念していたのである。

なお，釈尊はこの「二果報の平等」を説いたのち，ヒラヌヤヴァティー河の畔へと移動し，右脇を下にして入滅する。

3.3. 特　徴

以上の内容をまとめると以下の四つの特徴があげられよう。

- **釈尊の入滅はチュンダの供養が直接的な原因ではない。**
- **チュンダには「最後の供養」という意識はなかったが，結果的には「最後の供養」となる。**
- **釈尊はチュンダの供養を成道時の供養と等しいと考え，高く評価している。**
- **チュンダの供養を評価していない衆生もいる。釈尊は，チュンダの供養のせいで自分が入滅するという誤解が生じる可能性を懸念して**

いた。

まず，釈尊はチュンダの供養を受ける前に寿命の因を捨てているため，チュンダの供養のせいで入滅したわけではない。また，チュンダには自分が捧げる供養が「最後」である自覚はなかった。

釈尊はチュンダの供養は成道時の供養と等しい果報があると明言しており，その供養を評価していることは明らかである。しかし，その一方で，衆生から批判される可能性も想定しており，チュンダが非難されないように先手を打ったと言える。

チュンダの供養を評価しない衆生の心情は人情的には理解しやすい。釈尊の入滅は大悲痛事であり，あたかもそれを引き起こしたかのように見えるチュンダの行為を全ての衆生が評価することの方が難しいだろう。しかし，釈尊自身はそれを般涅槃に先立つ行為として評価している。釈尊が二果報の平等を説いたのは，チュンダが周囲から非難されるのを回避するためという意図もあったであろうが，釈尊自身がチュンダの供養に功徳があると考えていたことには変わりない。すなわち，初期〈涅槃経〉では，チュンダの供養を入滅に先立つ尊い行為ととらえていると言える。

4. 大乗〈涅槃経〉の描くチュンダ

4.1. 梗　概

大乗〈涅槃経〉は，釈尊最期の地クシナガラにおける入滅当日が舞台となっている。チュンダ登場の梗概は以下のとおりである。

(1) クシナガラにて釈尊は顔から光明を発し，世界中の衆生に入滅が近いことを知らせる。世界中から天人，鬼神などが釈尊に最後の供養を施そうとクシナガラに馳せ参じるが，悉く釈尊に断られる。

(2) チュンダも仲間と共にやってくる。

(3) チュンダは最後の施食を懇請。

(4) 釈尊はチュンダを賞賛し，承諾する。

(5) 最後の供養は為しがたいことであり，布施波羅蜜の成就であると讃える。

［北］初期〈涅槃経〉同様，二つの布施の果報が平等であることを記す。

(6) 周囲もチュンダを賞賛し，釈尊に延命を願い出るよう頼む。願い出たチュンダに釈尊は「諸行は無常であり，入滅は法爾である」と告げる。

(7) 文殊菩薩が現れ，如来の有為性・無為性についてチュンダと議論する。

(8) 釈尊の顔から再び光明が放たれ，入滅がいよいよ近づく。

(9) チュンダは食事の準備のため自宅に戻る。

(10) 迦葉菩薩と釈尊との問答(常楽我浄，四依，四聖諦，闡提成仏など)。

(11) 釈尊の光明を感じたチュンダは再び仲間と共に戻る。

(12) 神々はチュンダに施食を止めるように要請するが，釈尊は光明を放ち，施食を許す。

(13) 神々を含む大衆は再び，釈尊に最後の供養を願い出る。

(14) 釈尊は毛穴から仏と眷属を化現し，大衆の供養を受けられるようにする。

⒂ **釈尊自身はチュンダの供養を受け取り，神通力でそこにいる比丘衆に配る。釈尊の入滅が近いことを知った大衆に対し，釈尊は如来の常住を説き，皆安堵し，歓喜する。**

4.2. 詳　説

上記の梗概について，六巻本，北本，翻訳 tib を基に詳説する。

(1) **釈尊の顔より光明，諸衆の来集**　釈尊の顔から光明が放たれ，その光明によって世界中の衆生が釈尊の入滅が近いことを知り，そこにあらゆる生類が参集する。

入滅の兆候として顔から光明を放つという様相は両経典に共通するが，それが生じる時期や場所は両者で異なる。初期〈涅槃経〉では，チュンダの供養後，クシナガラの手前の場所であるが，大乗〈涅槃経〉ではチュンダの供養前，クシナガラにおいてである。つまり，前者では，チュンダは釈尊の入滅を知らずに供養をしたことになるが，後者では，知った上での供養ということになる。

釈尊の入滅が近いことがわかると，比丘，比丘尼，優婆塞，優婆夷，諸菩薩をはじめ，王侯貴族から下層階級の人々，神々や天龍八部衆，鬼神，マーラにいたるまで，あらゆる衆生が釈尊に最後の供養を捧げようと馳せ参じる。しかし，釈尊はまだ時期ではないという理由で，それらを悉く断る（「世尊知時默然不受[(7)]」）。ところが，仲間とともに現れた鍛冶屋（金細工師）の青年チュンダの供養は承諾するのである。

(2) **仲間と共に参集**　チュンダの居住地および施食の場所は，初期〈涅槃経〉ではパーパーであるのに対し，大乗〈涅槃経〉では以下に示すよ

うにクシナガラとなっている。

職業については，北本では「工巧之子」，翻訳 tib では *mgar ba'i bu*（金属細工師の息子）と，いずれも初期〈涅槃経〉と同じく「職人」としている。しかしながら，六巻本は「長者子」，すなわち大商人の息子と記す。その他にも，六巻本は仲間の人数についても，北本と翻訳 tib が15人と記すのに対し，「五百人」とし，異なる伝承である可能性がある。(8)

六857c28-29　爾時會中有拘夷城長者名曰純陀。與五百長者子俱威儀庠序。

その時，会衆の中に拘夷城の長者がおり，純陀（チュンダ）という名前であった。500人の長者の息子と共に威儀を正して並んだ。

北371c12-13　爾時會中有優婆塞。是拘尸那城工巧之子。名曰純陀。與其同類十五人俱。

その時，会衆の中に優婆塞で，是拘尸那城（クシナガラ）の工巧の子がおり，純陀（チュンダ）という名前で，仲間15人と一緒であった。

翻 t 45.20-46.1（D20b4, P21a6）　de nas 'khor de dag gi nang na grong khyer ku shi pa mgar ba'i bu dge bsnyen skul byed ces bya ba de mgar ba'i bu bcwa lnga dang thabs cig tu langs te / …

それから，彼ら取り巻きの中に，クシパ町（クシナガラ）の金属細工師の息子で優婆塞のチュンダ（skul byed）と呼ばれる者が，金属細工師の息子15人と一緒にやって来て，…

なお，初期〈涅槃経〉では，「仲間を伴う」という記述そのものがない。なぜ大乗〈涅槃経〉では仲間を登場させるのか，その理由は不明である。大変興味深い相違であるが，この点については別の機会に考察したい。

⑶ **チュンダ，最後の供養を懇請**　こうして釈尊のもとにやってきたチュンダはすぐに最後の供養を願い出る。

六858a3-5　唯願世尊。與諸大衆哀受我等最後供養。當令我及一切衆生悉蒙解脱。

世尊よ，どうか大衆のために哀れに思って，我々の最後の供養をお受けになってください。まさに私と一切衆生を解脱させてください。

北371c16-20　唯願世尊及比丘僧。哀受我等最後供養。爲度無量諸衆生故。世尊。我等從今無主無親。無救無護無歸無趣貧窮飢困。欲從如來求將來食。唯願哀愍受我微供。然後乃入於般涅槃。

世尊および比丘僧団よ，どうか哀れに思い，私たちの最後の供養をお受けください。無量の衆生を救うために。世尊よ，私たちは，これ以後，主人なく，親なく，救済者なく，保護者なく，帰依処なく，赴くところなく，貧窮で飢困します。如来にお越し頂き，食事を提供したいと願います。どうか哀れにお感じになって，私たちのわずかな供養をお受けになり，その後，般涅槃に入られますように。

翻 t 46.6-8（D20a5, P21a7）　bcom ldan ’das bdag ni sems can thams cad nges par bsgral ba’i slad du / bcom ldan ‘das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa’i sangs

rgyas dge slong gi dge ’dun dang bcas pa la zhal zas kyi tha ma dbul bar ’tshal te / bdag ni mgon ma mchis pa lags / rtsa lags ma mchis pa lags / skyabs ma mchis pa lags / phongs te re ba lags na / bcom ldan ’das kyis bdag gis phul ba’i zhal zas bzhes te / yongs su mya ngan las（mi）’da’ bar mdzad du gsol /

世尊よ，私は一切衆生を解脱させるために，比丘僧団とともにある世尊・如来・阿羅漢・正等覚者に最後の食事を捧げたく思います。私は，主人なく，友人もなく，帰依所もなく，希望もほとんどないので，世尊は私による振る舞いの食事をお受けになって，般涅槃なさってください。

チュンダは，衆生のために最後の供養を受け取ってほしい，そして，それを食した後に般涅槃，すなわち入滅してくださいと願い出ている。なお，翻訳 tib の北京版やデルゲ版の読みでは，最後の一文が「般涅槃しないでください」と否定文になっているが，本稿では，漢訳に沿って東京写本やトクパレス写本のヴァリアントを採用して読むこととする。(9)

（4） **釈尊の承諾**　この懇請を釈尊は承諾し，そこに集った大衆がチュンダを賞賛する。

六858a9-11　爾時世尊一切種智知一切時告淳陀言。如來應供等正覺與諸大衆當受汝請最後供養。

その時，一切智者である世尊は，一切の時を知って淳陀（チュンダ）に告げた。「如来，応供，等正覚者は大衆のためにお前の請う最後の供養を受けよう。」

北372a3-10　爾時世尊一切種智無上調御告純陀曰。善哉善哉。我今爲汝除斷貧窮。無上法雨雨汝身田令生法芽。汝今於我欲求壽命色力安辯。我當施汝常命色力安無礙辯。何以故。純陀。施食有二果報無差。何等爲二。一者受已得阿耨多羅三藐三菩提。二者受已入於涅槃。我今受汝最後供養。令汝具足檀波羅蜜。

その時，一切智者で無上調御士の世尊は純陀（チュンダ）に言った。「よいかな，よいかな，私は今，お前の貧窮を除断するために無上の法雨を降らせ，お前の身田に法芽を芽生えさせよう。お前は今，私に寿命・色・力・安穏・［無礙］弁才を求めた。私は必ずお前に常なる寿命・色・力・安穏・無礙弁才を施そう。なぜならば，純陀よ，施食（供養）には二つあり，［それらの］果報に差はないからである。二つとは何か。一つは［供養を］受け終わって無上正等覚を得るもの，二つは［供養を］受け終わって涅槃に入るものである。私は今，お前の最後の供養を受けよう。お前に布施波羅蜜を全うさせよう。

翻 t 47.4-8（D21a5, P21b8）　de nas bcom ldan 'das thams cad mkhyen pa rgyal ba gang zag bla na med pas ngar ba'i bu skul byed la 'di skad ces bka' stsal to // skul byed de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas kyis khyod kyi zhal zas tha ma sbyin pa'i pha rol tu phyin pa chen po bzhes par mdzad do //

それから，世尊，一切智者，王，無上人は鍛冶屋の息子チュンダに次のように言った。「チュンダよ，如来阿羅漢無上正等覚者はお前の最後の食事（松田35：B2 R2, paścimadiṇḍapāda），大いなる布施波羅蜜をお受けになろう。

六巻本，翻訳 tib は単に承諾の言葉だけを述べるが，北本は初期〈涅槃経〉と同じく，チュンダの供養には成道時の供養と等しい果報があること，また，その果報として「寿命・色・力・安穏・弁才」という五つがあげられている。

(5) **最後の供養は為しがたい**　供養を承諾されたチュンダは，そのことを喜ぶ一方で，釈尊が入滅することに対しては憂い嘆いたため，釈尊は以下のように，最後の供養がいかに成しがたいことであるかをチュンダに語る。

六858c22-29　如是純陀。佛興於世甚難得値。猶如海沙一金剛粟。人身難得又復過是。具足信心亦復甚難。猶如盲龜値浮木孔。得遇如來臨般泥洹。最後所供檀波羅蜜復難於彼。如優曇鉢華時一現耳。汝今純陀。莫生憂惱應大歡喜。所以者何。當作是念。今日如來與諸大衆受我最後大施供養。以是善利故應歡喜。

純陀（チュンダ）よ，そのとおりである。仏が世にあることは得難いことである。あたかも海岸のダイヤモンドの粒のごとくである。人身が得難いことはこれ以上である。信心をそなえることも大変難しいことである。あたかも盲目の亀が浮木の穴に遭うがごとくである。如来の般涅槃しようとする場にあって，最後に布施波羅蜜を供えることはそれよりも難しい。まるで優曇華が一つ咲くようなものである。純陀（チュンダ）よ，お前は今，憂い悩みを生じてはならない。大いに歓喜すべきである。なぜなら，次のように考えるべきだからだ。今日，如来は大衆のために私の最後の大いなる供養の施しを受けられた。この善利のゆえに，まさに歓喜すべきである。

北373a19-23　如是如是。如汝所説。佛出世難如優曇花。値佛生信亦復甚難。佛臨涅槃最後施食。能具足檀復倍甚難。汝今純陀。莫大愁苦應生踊躍喜自慶幸。得値最後供養如來。成就具足檀波羅蜜。

そのとおりである，そのとおりである。お前が説いたとおりである。仏が世に出る難しさは優曇華のごとくである。仏に会って信心を生じることも大変難しい。仏の涅槃に臨んで，最後に施食し，布施（波羅蜜）を供えることはその倍ほど大変難しいことである。純陀（チュンダ）よ，お前は今，大いに愁い苦しんではいけない。まさに躍り上がって自らの幸せを喜びなさい。如来への最後の供養の機会を得て，布施波羅蜜を成就したのであるから。

翻 t 50.4-12（D22b3, P23a5）　de nas bcom ldan ‘das kyis skul byed la bka’ stsal pa / skul byed de ni de bzhin no // de ni de bzhin te / sangs rgyas ’byung ba ni u dum bā ra’i me tog bzhin du shin tu rnyed par dka’o // dad pa yang rnyed par dka’o // chos thos pa yang rnyed par dka’o // de bzhin gshegs pa yongs su mya ngan las ’da’ ba’i tshe zhal zas kyi tha ma’i sbyin pa’i pha rol tu phyin pa phun sum tshogs pa yang rnyed par dka’o // skul byed gzhan yang khyod ma ngu mya ngan ma byed par bdag gis de bzhin gshegs pa la zhal zas kyi tha ma’i sbyin pa’i pha rol tu phyin pa phun sum tshogs pa thob bo snyam du dga’ ba skyed cig …

それから世尊はチュンダに言った。「チュンダよ，それはそのとおりである。それはそのとおりであって，仏が生じることはウドゥンバラの花のごとく，実に得難いことである。信心も得難いことである。

法を聴聞することも得難いことである。如来が般涅槃する時に最後の食事の布施波羅蜜を成就することも得難いことである。しかし，チュンダよ，お前は悲しむことはなく，苦しむことはなく，『私は如来に最後の食事の布施波羅蜜を成就した』と考えて，喜びを生じなさい。……

このように，チュンダの供養がいかに得難く尊いものであるかを，三千年に一度しか咲かないと言われている優曇華（skt. Udumbara）の花や，盲亀が大海で流木の穴に遭遇することに例え，釈尊はチュンダを諭している。

(6) 延命の懇請　一方，大衆はチュンダに「あと一劫の間，寿命を延ばすよう釈尊にお願いしてほしい」と懇願する。そのとおりに願い出たチュンダに釈尊は「諸行は無常であり，肉体はいつか滅びるものである」「肉体が消滅しても，仏身は常住であり，そのことを一切衆生に了解させるために，私は般涅槃を表すのだ」と述べる。

(7)–(10) 文殊との議論，釈尊の顔から光明　そこに文殊師利法王子が登場し，仏の有為性と無為性をめぐってチュンダと議論を展開する。最終的にはチュンダに軍配が上がり，そこで釈尊の顔が輝き始める。いよいよ入滅が近いことがわかると，チュンダは食事の準備のためにいったんその場を辞す。六巻本や南本では，ここで章が終了する。[10]

チュンダの不在中は，新たに迦葉菩薩が登場し，釈尊との問答が始まる。常楽我浄，闡提成仏といった大乗〈涅槃経〉にとって重要な教説が説かれる（南本「哀歎品」から「菩薩品」まで，計14品[11]）。

⑾-⒂　釈尊，チュンダの供養を受ける　チュンダが戻ってくると会衆は再度，釈尊に供養を願い出る。すると釈尊は自分の毛穴から諸仏とその眷属を現出させ，彼らに会衆の供養を受け取らせる。釈尊自身はチュンダからの供養を直接受け取る（南本「一切大衆所問品[⑿]」）。

六896b3-4　爾時純陀所設供具承佛威神。諸來大會皆得充足。

その時，純陀（チュンダ）の設けた供養の道具は仏の威力を承け，来集した大衆は皆，［それによって］充足した。

北424a19-21　釋迦如來自受純陀所奉設者。爾時純陀所持粳糧成熟之食。摩伽陀國滿足八斛。以佛神力皆悉充足一切大會。

釈迦如来は自ら純陀の奉設したものを受け取った。その時，純陀（チュンダ）が持参したよく実った上米の食事は摩伽陀（マガダ）国の［米］八斛を満たすほどであるが，仏の神力によって皆，悉く一切の大衆を満足させた。

翻 t 321.16-20（D141b4, P146b3）　de bzhin gshegs pa nyid ni tsun das phul ba'i zhal zas gsol lo // tsun das 'bras sā lu yul ma ga dhā'i na li ta brgyad las zhal zas sbyar ba yang de bzhin gshegs pa'i mthus dge slong gi dge 'dun thams cad zhal zas kyis khyed par mdzad do //

如来自身は，チュンダの差し上げた食事を召し上がった。チュンダはマガダ国の米八斛で食事を調理し，また，如来の力で一切の比丘僧団を食事によって満足させたのである。

大乗〈涅槃経〉では，釈尊は神通力により，施された食事を大衆にも分け与えている。また，当初は受け取らなかった会衆の供物も間接的にではあるが受け取っている点も興味深い。

こうして無事に最後の供養を捧げることができたチュンダは，この後，一闡提などについて釈尊にいくつか質問をし，最終的に釈尊より授記される。

4.3. 特　徴

以上がチュンダの登場する内容である。これらを整理すると以下のことがわかる。

- **チュンダは「最後の供養」という自覚をもっている。**
- **釈尊も衆生もチュンダの供養を高く評価している。**

初期〈涅槃経〉とは異なり，チュンダは釈尊の入滅を知った上で供養を捧げている。すなわち，チュンダ自身は「最後の供養」という自覚を持った上で施食していることになる。また，釈尊も衆生もともにチュンダの供養を高く評価している。初期〈涅槃経〉では，チュンダの供養に対して批判的な衆生がいる可能性を示唆しているが，大乗〈涅槃経〉では，釈尊と衆生の評価が一致しており，入滅，すなわち般涅槃は尊いものと受けとめていたと言える。

5. 考　察

初期〈涅槃経〉と大乗〈涅槃経〉の共通点と相違点をまとめたものが次の表である。

【共通点】

	初期〈涅槃経〉	大乗〈涅槃経〉
チュンダの職業	鍛冶屋（金属細工人）	
	karmāraputra, kammāraputta，工師子，工巧子，鍛師之子，mgar ba'i bu	karmāraputra，工巧之子，mgar ba'i bu shing mkhan gyi bu ［六］長者
チュンダの供養	最後の供養	
釈尊の評価	**高い**	
	成道時の供養と等しい果報	得難い （［北］成道時の供養と等しい］

【相違点】

	初期〈涅槃経〉	大乗〈涅槃経〉
会合する場所	パーパー	クシナガラ
仲間	無し	15人（［六］500人）の同業者
最後の供養	自覚していない	自覚している
受者	釈尊および比丘僧団	釈尊のみ
状況	説法会に馳せ参じる	すでに四衆や王侯貴族，長者，天人鬼神が最後の供養を断られている
釈尊の承諾の仕方	黙認	言葉で承諾
衆生の評価	**低い（非難）**	**高い（讃歎）**
チュンダの気持ち	後悔	歓喜

5.1. 場面設定の違い

鍛冶屋という職業は，初期〈涅槃経〉の法顕本を除き[13]，両者に共通する。また，名前もチュンダと考えて問題ないだろう。しかし，釈尊との会合場所，また出会い方は両者で異なる。

初期〈涅槃経〉では，クシナガラの手前の町パーパーで出会うのに対し，大乗〈涅槃経〉では，入滅の地クシナガラで出会う。また，前者では，チュンダ一人で馳せ参じるが，後者では，チュンダは仲間とともに参る。なぜこのような違いが生じたのかは明らかではないが，最後の供養を強調するのであれば，後者の設定の方が効果的である。初期〈涅槃経〉の場合は，たまたまやってきた釈尊にチュンダが供養するという形だが，大乗〈涅槃経〉では入滅を知った上で，供養を捧げるためにわざわざ駆けつけている。また仲間を伴うことで，一人でも多くの者とともに釈尊の最期に立ち会いたいという思いも感じられ，仏教徒としてのあり方を示唆しているように思われる。

5.2. 評価の違い

注目すべき相違点は，チュンダの供養に対する釈尊と衆生の評価である。釈尊の評価は初期〈涅槃経〉，大乗〈涅槃経〉ともに高いが，衆生の評価は両者で正反対である。

初期〈涅槃経〉では，衆生がチュンダを讃歎する文章は皆無であり，あたかもチュンダが批判されることは自明であるかのような文脈である。したがって，「涅槃を誘発した徳のない行為」という解釈も可能となる。それに対し，大乗〈涅槃経〉ではチュンダへの批判の記述はなく，一貫して讃歎されている。チュンダの供養は「涅槃に先立つ尊い行為」という解釈のみが可能であって，それ以外は導き出せない。

• 初期〈涅槃経〉……「涅槃に先立つ功徳のある行為」と「涅槃を誘発した徳のない行為」という二つの解釈が可能

• 大乗〈涅槃経〉……「涅槃に先立つ尊い行為」という解釈のみ可能

釈尊の態度から判断すれば，チュンダの行為は確かに「涅槃に先立つ尊い行為」と言える。それにもかかわらず，異なる評価が生じたのはなぜであろうか。筆者は，その理由は両〈涅槃経〉の主旨の違いにあると考える。

そこで，両者の主旨を確認したい。初期〈涅槃経〉が入滅前後の事績を述べたものであることは，その内容から明らかである。ラージャグリハに始まり，クシナガラにいたるまでの行程が丁寧に綴られ，釈尊の説法も記されるが，その内容が詳しく解説されることはない。また，釈尊の禅定による入滅の様子や，その後の荼毘や仏塔建立についても記されるが，般涅槃や仏塔建立の意味は説かれない。こういった事実から，その主旨は，釈尊の入滅前後の様子を客観的に記すものであると言える。

一方の大乗〈涅槃経〉では，クシナガラにいたる行程は述べられず，また，入滅の場面もその後の荼毘や仏塔建立の様子も記されない。序文に，釈尊の神通力によりその入滅を知った衆生が馳せ参じるなどの状況描写はあるが，大半は釈尊と弟子との問答である。その問答の中で，「如来常住」「一切悉有仏性」「闡提成仏」などの大乗〈涅槃経〉特有の思想や，四無量心の重要性，極愛一子地の慈悲心などの教義が説かれる。これらの事実から，同経の関心が入滅の事績ではなく，教義内容にあることがわかる。横超慧日博士を始め，多くの研究者も，同経の主旨が入滅の意義を明かすことにあると主張しており[14]，筆者もその解釈に賛成である。

チュンダの供養への評価は，釈尊の入滅に対する思いと重なる。入滅を悲しい出来事と受け取った場合，最後の供養は批判の対象となる。しかし，

入滅を価値あるものと考えれば賞賛に値する。これを後代に現れる「二諦説」で解釈してみると，前者は「世俗諦」の観点からの評価であり，後者は「勝義諦」からの判断と言えるのではないか。つまり，初期〈涅槃経〉は「世俗諦」の視点で記されているため，聖者が読めば「勝義諦」を読み取ることができるが，凡夫が読むと誤解を生じてしまうということである。客観的事実の記述を目的とする初期〈涅槃経〉は，いわば凡夫の視点で記されているものである。チュンダの供養の意義を如来の視点で記す必要はなかったのである。それゆえ，凡夫と如来，双方の尺度がそのままの形で記されることになったのである。

一方，大乗〈涅槃経〉は，「勝義諦」の観点のみから記されたと言える。当経典の主旨は入滅の意義を明かすことにあるため，如来の視点で記される必要がある。それゆえ，チュンダの供養は尊いものとして記されたのである。しかし，多くの衆生が釈尊の入滅を悲しい出来事と考えていたことは，初期〈涅槃経〉と同様である。大乗〈涅槃経〉には，入滅を延期してもらえないかと衆生が懇請する場面が何度も登場する。

6. まとめ

以上，初期仏教と大乗の『大般涅槃経』に記される仏弟子チュンダとその供養をめぐる記述について考察を行ってきた。

初期〈涅槃経〉は，釈尊の入滅を嘆き悲しむ凡夫の気持ちを包み隠さず記載しているのに対し，大乗〈涅槃経〉は，凡夫の気持ちのボリュームを下げ，釈尊の意図を強く打ち出していると筆者は考える。

この傾向を大乗経典全体に当てはめるのは早計であるが，大乗仏教は初期仏教を勝義的観点でとらえ直したものと言えるかもしれない。他の大乗

経典を読み解く際にもこういった視点をもち，その真偽について今後明確にしていきたい。

註

(1) 下田1997/2000，pp. 40–48，『大般涅槃経（南本）Ⅰ』（新国訳大蔵経涅槃部１）大蔵出版，2008年，pp. 13–97.

(2) 日本古写経中，七寺には全巻，部分的には聖語蔵，金剛寺，興聖寺，新宮寺，妙蓮寺に現存する.

(3) 『デンカルマ目録』Lalou No. 80（Marcelle Lalou, “Les Textes Bouddhiques au Temps du Roi Khri-Sroṇ-lDe-bCan”, *Journal Asiatique*, tome CCXLI, 1953, p. 321），芳村 No. 79（芳村修基『インド大乗仏教思想研究――カマラシーラ』百華苑，1974，p. 126）.

(4) 『デンカルマ目録』Lalou No. 249，芳村 No. 248（前掲両書 p. 325, p. 140）.

(5) チベット語訳資料の詳細については以下に詳しい。Akira Yuyama, *Sanskrit Fragments of The Mahāparinirvāṇasūtra. 1 Koyasan Manuscript*（*Studio Philologica Buddhica. Occasional Paper Series IV*），Tokyo，1981，pp. 8–13.

(6) 初期〈涅槃経〉には成道時の布施者の名称は記されないが，スジャーターが有名である。しかし，布施者には二つの伝承がある。すなわちSujātā（善生，Snp. A. 154，Dhp. A. 86，仏本行集経25T3：7）と，Nandā，Nandabalā（難陀，難陀波羅）の２人の牧女とする伝承（Divy. 392）である。大乗〈涅槃経〉の北本では「難陀」と「難陀波羅」と記される（T12：372b09）。下田1993：112，註(4).

(7) ［北］唯願如來。哀受我等最後供養。世尊知時默然不受。如是三請悉皆不許。（T12：367a17–19）［六］願佛及僧哀愍我等。與諸大衆俱受我請。受我請已當般泥洹。令我等飯佛大衆得最後施福。世尊知時默然不受。如是三請佛亦默然。（T12：854b4–7）［南］唯願如來。哀受我等最後供養。世尊。知時默然不受。如是三請悉皆不許。（T12：606b 22–24）［翻 tib］de nas bcom ldan ‘das thams cad mkhyen bzhin du cang mi gsung bar

gyur to // de dag gis lan gnyis lan gsum du de skad ces gsol kyang / lan gnyis lan gsum du bcom ldan ‘das cang mi gsung bar gyur to //

⑻ pañca-daśabhiḥ を pañcaśataiḥ と勘違いした可能性もある。下田 1993, p. 111 註⑶参照。また，六巻本の「五百」の解釈については下田 1991, pp. 39–40を参照.

⑼ 否定辞の有無については下田 1993, p. 112にも注記され，肯定文を採用している.

⑽ 六巻本は「長者純陀品」，南本は「純陀品」である。北本では分品されておらず，「寿命品」に含まれる。なお，「寿命品」は，六巻本における「序品」「大身菩薩品」「長者純陀品」「哀歎品」「長寿品」の 5 品全てを含んでいる。横超 1981の巻末には六巻本，南本，北本の三本対照表が付されている.

⑾ 南本「哀歎品」「長寿品」（北本「寿命品」），「金剛身品」（北本，同），「名字功徳品」（北本，同），「四相品」「四依品」「邪正品」「四諦品」「四倒品」「如来性品」「文字品」「鳥喩品」「月喩品」「菩薩品」（北本「如来性品」）。六巻本は南本とほぼ一致するが，「分別邪正品（＝邪正品）」と「問菩薩品（＝菩薩品）」の 2 品のみ異なる.

⒀ 六巻本「随喜品」，北本「一切大衆所問品」.

⒁ 法顕本では「長者」と記される.

⒁ 横超 1981，p. 44.

参考文献

丘山　新　「遊行経」（『現代語訳「阿含経典」――長阿含経』第 1 巻）　平河出版社，1995.

雲井昭善　『和訳大般涅槃経　法顕訳――ブッダ最後の旅路』　東京美術，1996.

下田正弘　『涅槃経の研究――大乗経典の研究方法試論』　春秋社，1997/2000.

『蔵文和訳『大乗涅槃経』（1）』山喜房佛書林，1993.

「『原始涅槃経』の存在――『大乗涅槃経』の成立史的研究（1）」（『東洋文化研究所紀要』113号：1–126）1991.

高崎直道『和訳涅槃経』東京美術，1993.
塚本啓祥・磯田熙文校注『大般涅槃経（南本）Ⅰ』（『新国訳大蔵経』涅槃部１）大蔵出版，2008＝新国訳「南本」.
常磐大定（横超慧日校訂）『涅槃部１』（『國訳一切經印度撰述部』） 大東出版社，1929.
中村元 『遊行経』上下（『佛典講座１』阿含（壱））大蔵出版，1984/1985.
『ブッダ最後の旅』岩波書店，1980.
松田和信『中央アジア出土大乗涅槃経梵文断簡集――スタイン・ヘルンレ・コレクション――』東洋文庫，1988.
望月良晃 『大般泥洹経・大般涅槃経後分』（『新国訳大蔵経』涅槃部５），1999.
岩本裕 『佛伝文学・佛教説話』（『佛教聖典撰』第２巻，pp. 37–152），1984.
横超慧日 『涅槃経』（サーラ叢書 26）平楽寺書店，1981.
BAREAU, André, Recherches sur la Biographie du Buddha dans les Sūtrapiṭaka et les Vinayapiṭaka anciens: II. Les Derniers mois, le Parinirvāṇa et les Funérailles, Tome I, Paris, 1970.
HABATA, Hiromi, Die zentralasiatischen Sanskrit-Fragmente des Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra (Indica et Tibetica 51), Marburg, 2007.
WALDSCHMIDT, Earnst, *Das Māhāparinirvāṇasūtra*, Kyoto, 1986 (reprint from 1950–51).